分科会「ろう教育」
～戦前にパージされたろう教員の実績を再評価する～

助言者：中根伸一・新谷嘉浩／司会：桜井　強／記録：新谷嘉浩

■1．テーマを取り上げた理由

なぜ、戦前の昭和初期にろう教員が追放されたのかを共に考えたい。現在、戦前のろう教員が何人いたかを調査中。

前に北海道のろう教員で知っていたのは2人だけ。ある聾学校の記念誌を見たところ、ろう教員の名前は載っているが、ろう教員が手話で教えていたという記録がほとんど載っていない。まるで創設から口話で教えていたという歴史をきれいに書かれていた。その聾学校は昔手話教育があったことが全て削除されていたことに驚嘆した。

他の資料を照らし合わせて、手話で教育を行なっていた事が判明。それにあわせてろう教員がいたかどうかを調べたところ、16人いたことが判った。(平成16年12月5日現在)

他の聾学校の記念誌を見てみるとろう教員の名前がの載っていないところもあれば、ただ名前しかの載っていないところもあった。結局、ろう教員は歴史の中に埋もれてしまうのか？意図的に消されてしまったのか？それとも忘れられたのか？全国的に同じ様なケースがあると思われる。

聴き取り調査でろう者から「ろう先生はいたよ」「たいへん大変可愛がってもらった」「教え方がはっきり判りやす易かった」と聞きます。なぜ何故、ろう教員が不明になったのか？ろう教育史においてろう教員のパージ（追放）があったからだと思う。

パージの理由は、口話教育でろう教員は不要だという歴史的事実がで出ていますが、逆にろう教員がパージにあったという資料が今のところ見つかっていません。

■2．第1次パージと第2次パージ

全体的にろう教員の数が減ったのは昭和2～6年頃。(「第1次パージ」)
その後、太平洋戦争が始まってから、先生たちが徴兵(ちょうへい)によって聾学校の教員不足となった。その理由でろう者を教員として採用した為、昭和16年から急増します。終戦後、昭和22年頃から再び急減します。(「第2次パージ」)

■3．教員の名簿について

中根、桜井、新谷3人共同で作った資料が「戦前の全国聾唖教員名簿（明治11年～昭和20年)」です。(81～93頁参照)

この名簿は約70％判っていますが、残り30％は皆さんの力で調査していく必要があります。そうすれば、ろう教員がパージされた理由がわかってくると思います。調べていないから判らないのです。そのことを大切に討論の中で取り上げていきたい。

名簿作成の基準をどうやって決めたのか？その中で身分（教諭・助教諭・嘱託(しょくたく)・助手）を決める基準はわからない。ろう教員がいたことだけを名簿に載せた。身分については後で調べたほうが良いという判断で作った。

名簿は身分を記載できなかったが、戦後の西田(にしだ)裁判（※1）、今のろう教員がなぜ校長になれないのか？も関わってくるのではないだろうか？

■4．第1次パージの歴史的背景

大正13・14年頃、全国の聾学校ほとん殆どが手話法でした。全国的に聾学校は手話ができる先生を要望していました。東京聾唖学校師範(しはん)科、言わば先生になるための聾学校が東京にあり、師

範科を卒業した先生を要望して、全国各地の聾学校へほうしょく奉職した。その後、小西信八校長の命令で他の聾学校へ転勤となった方もいます。

「戦前の全国聾唖教員名簿（明治11年～昭和20年）」を見てわかるように、殆ど２・３の聾学校へ転勤となった先生方もお居られます。

純口話法を提唱した川本宇之介、橋村徳一、西川吉之助が出てきた。一方に東京にに日本聾話学校が設立し、口話の実践が始められた。そこで「手話は禁止、口話が必要」と東京聾唖学校師範科の中で小西校長の追放運動が始まった。

小西校長が辞任したあと、新任に樋口長市が就任。「手話不要、口話教育が必要だ」と論文での述べた。特に『聾唖教育』（※２）で「ろう教員は不要。文章がうま上手くなく、教え方が下手でみんなが恥かしく思っている」事を載せました。

これらがきっかけとなり、全国的に口話教育へ転換となった訳です。その為、ろう教員の出番がなくなっていきました。逆にろう教員の存在が邪魔となり、追放となった訳です。ろう教員が追放となった原因は、口話教育の普及にあると思います。

■５．口話学級を設置した聾学校の年順

「口話法の普及状況」岡本稲丸氏がまとめた資料です。全国の聾学校で口話学級を設置した年を表にしたものです。口話学級を早く設置した学校は和歌山。学校を見てみると大正14年から昭和６年が多い。東京都立聾学校（大塚ろう学校）も口話法の学校としてスタートした。大阪聾口話学校は大阪市立校に対抗するために設立。大阪市立校は昭和７年に口話学級を設置。この年はO.R.Aシステム（※３）を発表した。

堺市立は阪府立堺聾学校とは別。大阪府立堺聾学校は戦後に設立された聾学校。昭和17年以降で手話学級を設置していた聾学校は、浜松・台南・福島。但し、手話口話学級別なしと報告された聾学校もあり。佐世保は創立時は手話であったが、後年に口話法に変わったと話を聞きました。広島は意外と早く大正14年から設置されています。

この資料から見て、聾学校の中で全ての学生を手話から口話へと転換させた訳ではない。今までの聾学校はすべてが手話法だった。その中で一つの口話クラスを設け、テストした。だから、聾学校全体が口話法と変わるのは後になる。

東京・京都・小樽の記録を見ると初等部２年は手話、１年は口話クラスでお互いに交流させないようにその間に壁で遮断したり、別々に通学門を作った。この状態が２、３年以降も続き、中等部５年の手話クラスを最後に中等部４年以下は口話クラスとなった。１年１年ごとに手話クラスが徐々に減ってな無くなったという記録が残されていた。他の聾学校も大よそ同じだったのではないか？調べてみたらわかると思う。

聾学校が創設されたときは手話だったのか、口話だったのか？考えられる事は創設から口話だった聾学校はいくつかある。他のほとんどの聾学校は手話からスタートだった。例えば、日本聾話、大阪聾口話、新潟聾口話、滋賀聾口話、大分、兵庫。

>質問　創立年月もつけた方がわかりやすいのでは？

>返答　「宮城大会報告書」の分科会「ろう教育」のところに年表（※４）が載っていますので、そちらを見てください。

>質問　東京聾唖技芸はどんな聾学校だったのか、わかりますか？

>返答　東京聾唖技芸は、資料が見当たらないので、今のところわからない。今後の研究者が出てくることを待つしかないです。

>質問　口話の三羽カラス（川本・橋村・西川）が始めた全国聾口話普及会が愛知で始まった

のにも関わらず、豊橋が遅い理由は何か？

>返答　豊橋の校史を見ると手話法から始まりました。創立から吉川金造（※５）先生がおられましたが、質問については詳しく知らないので、調べてみる必要があります。

■６．出身校のろう教員

自分の出身校にろう教師がいたかどうか調べたかどうか？

>橘（富山）富山訓盲院の創始者・並木先生の銅像は聾学校にはなく、盲学校にあります。富山訓盲院ではろう先生はいません。昭和以降、ろう者の絵画の非常勤講師（？）が20年間働いていました。定年退職か？どうかわかりませんが確かにいました。現在、若いろう先生が一人います。

>大塚（長野）創立以来ろう先生を雇ったという話を聞いたことはありません。別に普通の大学を卒業した後、失明して盲となった。長野県立盲唖学校設立のため、按摩の資格を取るために東京盲唖学校へ入学した。資格を取った後、長野県立盲学校へ奉職した人はいました。残念ながら、長野はろう先生がいませんでした。最近、松本ろう学校では新しいろう先生が採用されました。小岩井是非雄先生から２人目です。松本ろう学校では定年退職で一人欠員があったので、採用されたのです。長野はまだなので待っています。

>木村（神戸）詳しくは知らないですが、知っている範囲で、戦前は広畑氏（元全日本聾唖連盟編集長）（※６）と村井さんが神戸聾学校の先生だったという話を聞いています。名簿を見て初めて知った名前があります。兵庫県立聾学校はいないはずはないと思うので、仕事上で先輩方に聞いてみます。何かわかったら、情報を提供したいと思います。

>岩月（岡崎）大正8年、桑子勤治（※７）というろう先生がいました。昭和８年辞職されました。それ以来、今年４月、ろう先生が入りました。約70年ぶりのことです。

>石井（広島）ろう先生で知っているといえば、高増先生です。実際に教わっていませんが、退職後遊びに来られたのを見たことがあります。いつもベレー帽をかぶっておられましたね。他に聴者の先生ですが、貞広先生が小学部４、５年ごろに転勤されました。その先生も手話で授業をしていました。とても人気のある先生でした。

>陶山（大阪市立）戦後の話、ろう先生がたくさんいました。正式ではなく、母校卒業後、雇いとして木工や裁縫などを教えていました。広島の場合、聾学校が３つあります。今、ろう先生は4人います。それぞれ広島・尾道・呉の各聾学校へ行ったり来たりあちこちいどう異動しています。寄宿舎もろう先生がいます。

>亀田（山口）山口県立聾学校下関分校を幼稚部から中学部まで、山口県立聾学校の高等部を卒業しました。その時、ろう女性の先生がおり、洋裁の先生でした。恐らく非常勤講師だと思います。他にはいませんでした。戦前のことは知らないです。私の母がろう者でデフファミリーですので、実家へ帰ったときに聞いてみます。

>新谷（大阪）私の妻は大阪府立生野高等聾学校卒業。学生のとき、生野聾学校にろう先生がいました。話によると田畑先生がいました。他に裁縫の先生がいましたが、手話ではなく口話で授業を教えていたとの事。手話でなく、口話で授業を行なっていたろう先生もいた。

■７．資料『文部省年報に見る聾（唖）教員の推移』から

岡本稲丸氏がまとめた資料『文部省年報にみ見る聾（唖）教員の推移』です。毎年文部省から報告される「文部省年報（以下、年報）」の中で道都府県のろう教員が何人いたかをまとめた資料です。

北海道は大正９年（２年の間違い）から毎年報告されています。他県では、新潟・愛知・島根・長崎が毎年報告されていることがわかります。しかし、「年報」で四国・九州はろう教員の

数が書かれているが、誰がいたのかまったく情報がなく名簿にはブランクが目立つ。

京都の場合、昭和12年を最後に戦後、中西先生が採用されるまでろう教員はいなかった。

長野の場合、戦前までまったくいなかったと報告されている。本当は松本ろう学校々長・小岩井是非雄先生（※７）がいたのにも関わらず何故なのか？調査する必要がある。福井の場合、戦争中にろう教員を雇った経過がわかります。新潟は恐らく長岡聾学校だと思われます。北海道は２人と報告されているが、中根氏の調査で16人いた事で、数字的に矛盾がある。

■８．ろう教員の調査方法（その１）

調査方法は、まず、古い聾学校史にある先生の名簿を見て一人一人見る。そして、自分の卒業したろう聾学校の名簿と照らしあわせる。両方の資料にろう先生が同じの載っているかどうかを調べる。これは簡単な調査方法。二番目は、他の聾学校の名簿を集めて照らしあわせる。同じ名前が見つかったら、他の聾学校へ転任したとわかる。一番良い資料は、東京聾唖学校師範科の卒業名簿です。それを照らしあわせると意外に広い範囲でつながりが徐々にわかってくる。

例えば、この資料（『文部省年報にみ見る聾（唖）教員の推移』）をみると、年度ごとに１人１人と書いてありますが、１人は同じ人と縛らないことです。1人や辞めて、新たに1人採用されたのかもしれません。北海道でみつけたろう教師の人数は16人。資料では２人とか１人とかはっきりしない。ろう先生がいるのにも関わらず報告がも漏れたのか？ポケットマネーで採用したのか？校長先生の腹一つで採用したのか？文部省に報告しなかったろう先生もかなりいたかもしれない。

もう一つ、高齢ろう者に聞くと無給で技術生として採用された方もいました。技術生は今でいえば技術が優秀生徒を採用して教師をまかされた。１～２年間無給で教師をしたろう者がいたかもしれない。数字で表していないろう教師がいたかもしれません。聞いて調べた名簿とこの資料とはまったく合わない。

調査で苦労したことは、調査で大変だったことは一つ。高齢ろう者からろう女性の先生がいたことを聞きました。名前を聞くとまったく思い浮かばない。たまたま名前の○○○○の頭の字、「船」だけ覚えている。その後、あらゆる昔の資料を東京や大阪などで探し、やっと見つけました。「船崎（ふなざき）」とわかったのです。証言者にもう一度聞いたところ、その通りだと判明しました。そこから調査がスムーズになったのです。結構大変でした。

判明したろう教師は当時45歳でしたから大正時代のろう教師ならば、今の高齢ろう者に聞けばなんとかわかりますが、明治時代のろう教師については聞いても無理でしょう。

■９．『掘りおこし』運動

私の知っている聾史調査仲間が歴史から埋もれた人たちを掘りおこして発表報告することは、その人々を尊敬する気持ちをもつこと。その報告が次々と出ました。特に橘さんの報告でした。明治13年、全国で４番目に設立したろう学校長がろう者であったことを発表しました。今まで誰も知らなかったことを橘さんは発表したのです。

その運動は全国的に歴史から埋もれたろう者たちを調査していく「掘りおこし」運動が大切ではないかと思うのです。

名もないろう者が歴史のやみ闇へ消えていく。本当にろう児のために生涯を捧（ささ）げたろう教師が昔はたくさんいたのです。間違いなく歴史の中に埋もれてしまい、そのまま放っておくことがいいとは思えない。調査してきちんと記録に残して後世（こうせい）に伝えていく必要があります。歴史の中に埋もれたろう教師たちを掘りおこしていかないと今後のろう教育、正しいろう教育のあり方を考える場合、きちんと記録に残していかないとダメたと思います。そういう意味で今の私たち歴史調査の立場は義務なのか、使命だと私は重く捉（とら）えています。誰が調べて掘りおこすのか？ろう者

自身だと思います。誰も調べてくれないまま、消えてしまうおそ恐れがあるのです。今が一番大切な時期ではないか？と思うのです。

■10. ろう教員の調査方法（その２）

明治時代のことを調査したい場合、80～90歳の方々をまと的をあてて調べたほうがいいです。ろう学校同窓会名簿を見るとき、個人プライバシーの関係で難しい。やはり一軒一軒家に行って調べると時間がかかる。

聴き取り調査の時に音声テープの録音を行なっています。それと手話通訳と書き起こし担当ととの確認、質疑応答の内容を用意すること、ビデオカメラの収録を用意しています。（橘）

今日午後から個人研究論文発表があります。個人研究論文を書くまでたいへん大変苦労しました。僕の研究テーマの一つです。戦前、名古屋ろう学校はろう先生がいないと思い込んでいました。いた筈と言われたことがきっかけでした。調査をしたらろう先生がいたことが判明。戦前、名古屋ろう学校は３人いました。その中の一人については、午後から発表します（※９）。他に２人いたことがわかりました。新しい情報を新谷さんよりいただきました。僕たちの住んでいる地域で調査をするのも聾史学会の仕事の一つだと思います。みなさんもがんばってください。（桜井）

桑子勤治氏の調査方法について、４年前桑子勤治氏の息子の奥さんが用務員で顔をよく知っていました。僕は奥さんを知っていますが、桑子氏をよく知りませんでした。市橋校長先生が桑子先生の息子さんの奥さんですよと言われたのですが、知らなかったのでした。岡崎聾学校の資料室にあるアルバムの写真のなかで、桑子氏が写っている写真を見て、気がつきました。僕が遺族の家へ直接行くのを遠慮して、市橋校長先生にお願いして連絡を取ってもらいました。許可を受けて僕一人で行きました。家へ訪れたとき、向こうも僕のことを覚えていてくれて良かった。僕から桑子勤治氏の写真アルバムはありますか？と聞いたところ、あると言って、アルバムを持ってきてくれました。その後、みなさんの協力を得て、聴きとり調査などを行ないました。聴きとり調査でえ得た情報と資料を照らしあわせて本を作りました。（岩月）

今まで苦労したことは、研究テーマをひとつに絞って、例えば○○について調査を始めますが、かなら必ず行き詰まることがあります。それは遺族のほとんどが聴者です。僕はろう者なので、コミュニケーションに困ったので、手話通訳をつれて行ないました。これが大変でした。（桜井）

調査で大変だったのは、遺族の方々は手話がまったくできないのでコミュニケーションが難しい。いつも手話通訳に頼んで一緒に行った。仕事を休んでもらっているので、謝礼をあげています。いろいろ不便な面があるけど、同じ仲間であれば一緒に調査できますが、通訳だったら歴史研究に興味ないので、頼むのですがお金がかかるのです。聾学校へ行くと先生は手話ができない。口話で話しても通じないのです。僕の声はろう者の声だからできないのです。聞いてもわからない。こっちは声が下手､向こうは手話ができない､これでは通じないのです。筆談しかないのです。

聾学校史を編纂（へんさん）した人に会って聞いても、手話教育を行なった歴史を編集者自身も知らないのが多いんです。学校を定年した校長先生に会いました。

「歴史をまとめたのは貴方ですね？」（中根）

「そうです。」（校長）

「手話教育の歴史を知っていますか？」（中根）

「知らない。前に編集した内容をそのまま写しただけです。」（校長）

知っている校長先生の中には手話教育を行なった歴史をわざと落として、全体的に口話教育を行なったような歴史の書き方が全国的に多いように思います。これが一番大きな問題だと思います。手話教育の歴史がないので、ろう教員がいなかったと思うのですが、それは間違いです。私は始めはそう思ったのです。調べてみると意外に多くのろう教員がいたのです。その方々をその

まま埋もれることなく、発表することが大切だと思うのです。（中根）

調査において、聾学校同窓会と関わりは欠かせない。また、聾学校へ資料調査のとき、資料搾取（さくしゅ）と誤解されないよう、自分の研究をしっかりアピールすることも大事なのではないか？と思う。（新谷）

■11. 失われた聾学校史

浜松聾学校は、戦前私立時代はろう教員が多かった。県立移管のあと、私立時代の記録が無くなっている。抹殺されたという話があるが、空襲で資料が焼けてしまい、まったく残されていない。（桜井・新谷）

札幌の場合、戦前戦後、学校はあった。戦前の聾話学校は昭和20年７月に学校が廃校となり、残った教員生徒は帯広へ移転となった。名前は札幌聾話学校そのままでしたが、道庁の命令で御影聾学校と改称となった。1年後、生徒が少なくなったので、帯広聾学校と合併となった。結局、札幌市内では聾学校がなかった。昭和24年、親たちが集まって相談し、先生を採用し、聾学校を建てたのです。その聾学校の歴史を見ると戦前の歴史を載せていない。全く先生たちも違うし、生徒もその聾学校へ転校した人がいない。結果、その聾学校は昭和24年に創立として書かれている。おかしいと言ったら、その辺りの事は知らないと校長の返答だった。札幌の聾教育史の場合はそれぞれの聾学校史を載せることができるが、校史となると戦前史は削除されるわけです。

同じく浜松の聾教育史ならば、戦前史は載せるが、校史となるとどうなのか？その辺があいまいです。（中根）

戦前史は空襲によって資料が焼かれて無くなった聾学校もあり、調査に限界があるところもある。（新谷）

■12. ろう者が創立した聾学校

北海道のろう校長は、辻本繁。全国では４人いた。松本の小岩井是非雄、金沢の松村精一郎，宇部の小林静雄（※10）の４人です。今まで資料に残っていたのは２人（辻本・小岩井）。調査でわかったのは２人（松村・小林）、言わば文部省の記録には載っていないのです。小岩井も載っていない。辻本は北海道の八雲という所で聾学校を設立しました。昭和３年のことです。小岩井も松本聾学校長に就任した年月も昭和３年。小林静雄氏が建てた宇部聾唖学堂も昭和３年です。松村精一郎が明治13年に金沢盲唖院を創立して以来、昭和３年に３人が聾学校校長に就任。その後はゼロです。

口話教育が始まったのは大正14年。その後、全国的に広まり、昭和５～７年頃にピークになる。そんな時代の中で３人のろう者が聾学校を建てたのはすごいと思う。

戦後公立移管のあと、正式に校長と残ったのは２人（辻本・小岩井）。小岩井の場合、昭和26年退職、辻本は昭和29年に退職した。日本で最後のろう校長が辻本繁です。残念ながら辻本の記録は残されていない。昭和３年に八雲で聾学校を建てからしばらくして、昭和12年に室蘭へ移転し、戦後、昭和29年に辞職した。室蘭聾学校史を見ると昭和23年からと書かれてありました。戦前の第１回卒業生、第２回、第３回…、卒業生名簿がない。言わば、記録がないのです。理由は大火事のため、資料が焼かれてしまった。広島も同じではないか？空襲などで焼かれてしまったが、幸い辻本の資料はわずかながら北海道ではなく東京・大阪に残されていた。それを集めて歴史が少しずつわかってきた。そういう例がある。

■13. まとめ

終戦前、聾学校では先生たちが戦地へ行かされたため、教員不足となった。代わりに卒業生の

ろう者を採用したため、全国的にろう教員の数が増えました。ほとんどが嘱託か技術などの掛け持ちが多かった。終戦後、出戻りで先生が帰ってきたので、再びろう教員の追放が始まったのです。たまたま資格を持っていても口話教育や義務教育化などで大いに聾教育界が変わったため、ろう教員の存在が邪魔となった。周りからろう教員は要らない、邪魔だと言われて辞めたろう先生もいたと記録にある。解雇ではなく自主辞職という形で辞めたろう教員もたくさんいたので、これはパージと似ている。これは背景から調べてわかった。他にまだ埋もれているろう教員もいるかもしれない。

「歴史は繰り返す」という言葉がある。現在、聾学校が次々と廃校となり、特別支援学校と変わっていく。もしかしたらろう先生は不要だと追放される。言わば「第３次パージ」が近い将来、起こるかもしれない。戦後50～60年からろう先生の採用が増えた。今後は採用が増えるか？そのままか？減らされるか？技術の先生が真っ先に追放されるといった第3次パージがおこる恐れがある。今が調べることが大切だなと思う。（中根）

（※１）西田裁判
『手話と補聴器で歩んだ道　医学生からろう学校教師へ』西田一著・文理閣
（※２）『聾唖教育』第９号（昭和４年12月30日発行）に巻頭言（かんとうげん）「聾唖教員の将来」奚信生。「日本聾史学会報告書・第１集・大阪大会」134－135頁に記載あり。
（※３）参考文献
『五代五兵衛』福島彦次郎著（五代五兵衛頌徳會）1937年　Ｐ154～160にＯ.Ｒ.Ａシステムの記載あり。
「ＯＲＡシステム（資料抜粋）」井上彰夫・1968年　原文は400字詰原稿用紙205枚に手書きで記されたもの。大阪市立聾唖学校の『研究紀要』26（1994）資料として収録されている。
（※４）年表
「日本聾史学会報告書・第２集・宮城大会」に記載あり。資料「聾教育史」上書101 - 111頁。
（※５）吉川金造氏
『聴覚障害教師の嚆矢（こうし）　吉川金造先生』愛知県立豊橋聾学校創立百周年記念事業実行委員会・平成10年７月８日
（※６）広畑肇（はじめ）氏
『紙の機関車』（財）全日本聾唖連盟出版局10－13頁
（※７）桑子勤治氏
『偉大なる先達（せんたつ）を慕いて　―岡崎聾学校の礎（いしずえ）を築いた二人の先生―』愛知県岡崎聾学校創立100周年記念事業実行委員会・平成15年11月1日発行　89－138頁
（※８）小岩井是非雄氏
『伝記：小岩井是非雄』長野県立松本ろう学校同窓会・平成13年４月30日発行
（※９）個人研究論文
『元愛知縣聾学校教師（現：名古屋聾学校）土井久吉の生涯』桜井強、岩月由典、佐藤孝裕・同書個人研究論文の欄に掲載あり。
（※10）小林静雄氏
『ろう教育にかけたろう教師　―小林塾の足跡を求めて―』宇部手話会　2002年３月31日発行